

Development and review of the validity of an "instrumental activities of daily living test" (IADL test) performed as a desk evaluation of patients with Alzheimer's type of dementia

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Fujita, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/28528">http://hdl.handle.net/2297/28528</a>

平成 22 年 8 月 5 日

## 博士論文審査結果報告書

報告番号 医博甲第2141号

学籍番号 0727022021

氏名 藤田 高史

### 論文審査員

主査（教授） 染矢富士子

副査（教授） 清水 順市

副査（教授） 能登谷 晶子



論文題名 : Development and review of the validity of an "instrumental activities of daily living test" (IADL test) performed as a desk evaluation of patients with Alzheimer's type of dementia

### 論文審査結果 :

近年認知症予防・支援の観点から、初期段階のアルツハイマー型認知症（ATD）の記憶、注意、遂行機能の評価と介入が注目されている。遂行機能の評価には、手段的日常生活活動（IADL）で評価するが、IADLスケールは質問表形式が多く、直接対象者に施行可能で簡便かつ質的に評価可能なものはない。本研究では机上で実施可能なIADL評価方法（机上IADL検査）の開発を試み、その妥当性と特徴について検討した。「対象と方法」健常群24名（MMSE28.9±1.4）とATD群21名（MMSE19.8±4.4）とした。机上IADL検査の課題は、電気ポットでお湯を沸かす、お湯が沸いたらコンセントを抜くなどのIADLの課題を9つ設定した。得点化は、各課題の適切・不適切行動と検査実施時間、実施順序とした。本検査法の妥当性検討のために、IADL ScaleとFenchay Activities Index（FAI）を実施し、机上IADL検査得点との相関係数を求めた。また、机上IADL検査に影響する因子を検討するため、各神経心理学的検査と高齢者うつスケール短縮版を実施し、これらと年齢、性別を変数としてステップワイズ重回帰分析を実施した。「結果」机上IADL検査得点とIADL Scale、FAIの間には、ともに強い相関を認め、重回帰分析では、机上IADL検査得点に対し「遂行機能症候群の行動評価」他3検査で高い寄与率（ $R^2=0.84$ ）を示した。また適切行動の出現数や効率の良い実施パターンも健常群が有意にATD群より高かった。「考察と結論」机上IADL検査は、軽度ATD者の症状を反映したIADL能力を評価している検査であり、行動評価よりもIADL Scaleとの相関が高く有用と考えた。さらに、本検査は適切・不適切行動や実施順序を検討することが可能で、健常者とATD者の行動の違いを質的に捉えることができ、IADL評価スケールには無い特徴があると考えた。「審査結果」本検査法は質問紙法にはない、認知症者の質的検討も評価可能で、具体的にリハビリの介入計画を作成できる点で実用的である。以上より、本研究は博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。